

15世紀マーワランナフルとホラーサーンの 社会・政治状況におけるナクシュバンディズムの位置

——『ナヴァーイー・アルバム』所収書簡に基づいて——

A. ウルンバーエフ
(久保一之訳)

はじめに

15世紀, すなわちティムール朝時代は, 中央アジア, 特にマーワランナフルとホラーサーンの, 社会・政治史, 経済史, 文化史において, 特別な位置を占めている。研究者たちが到達した結論は, 上述地域の歴史においてこの時代は, アル・ホーラズミー, ビールーニー, イブン・スィーナーなど傑出した学者たちが活躍した, 9-10世紀に見られる学術・文化の繁栄以来の, ルネサンスの時代とみなすことができる, というものである。このような全般的な文化の向上により, 15世紀には, 社会の精神面での進展も見られ, この地に誕生し, その後この地域の社会と政治に大きな影響を及ぼしたスーフィー教団, ナクシュバンディーヤは, さらなる発展と広まりを見せた。

I

ナクシュバンド(Naqshband)という異名で知られるこの教団の創設者, バハーウッディーン・ムハンマド・イブン・ブルハヌッディーン・ムハンマド・アルブハーリー(Bahā' al-Dīn ibn Burhān al-Dīn Muḥammad al-Bukhārī)は, ヒジュラ暦718年ムハッラム月(1318年3月), プハーラーの東7 kmにあるカスリ・ヒンドウヴァーン(Qaṣr-i Hinduwān)村に生まれた。後にこの村は, バハーウッディーンの神聖さ故に, カスリ・アーリファーン(Qaṣr-i 'Ārifān), つまり「真理を知る者たちの砦」と呼ばれるようになった。バハーウッディーンは, まさにこの地で, ヒジュラ暦791年ラビーウル・アッワル月(1389年3月)に没した。

バハーウッディーン・ナクシュバンドは二度メッカ巡礼を行った。スーフィズムにおける彼の指導者は, ホージャ・ムハンマド・バーバーイ・スィーマースィー(Khwāja Muḥammad Bābā-yi Simāsī/1340年没), 後にはアミール・サイイド・クラール(Amīr Sayyid Kulāl/1370年没)であった。同時にバハーウッディーンは自らを, アフマド・ヤサヴィー(Aḥmad

Yasawī/1166年没)やアブドウル・ハーリク・グジュドヴァーニー(‘Abd al-Khālīq Ghujduwānī/1220年没)といった著名なスーフィーたちの、精神上の弟子とみなしていた。

バハーウッディーン・ナクシュバンドの教えは、完全に正統派イスラームの枠に収まっている。その原則は、預言者ムハンマドとその教友たちの慣習への、一貫した追従と、それらの主要な規定の実生活への適用である。預言者の生涯を正確に追従しつつ、バハーウッディーン・ナクシュバンドが、自らの教えの基礎に置いたのは、“faqr”(自由意思に基づく貧しさ)の要請であった。しかし、彼は、貧しさを、他者の慈善をあてにすることとは解さなかった。個人の労働によって得られたものだけを、許される生活の糧とみなしていた。バハーウッディーン・ナクシュバンドは自らの原則に基づいて農耕に従事し、自身の所有する小さな区画に小麦や、やはずえんどう(māsh)を栽培していた。

バハーウッディーン・ナクシュバンドはスーフィーに出家や隠棲は要求しなかった。彼は自らの要請を、次のようにまとめている。「集団の中での隠棲(khalwat dar anjuman)、故郷における旅(safar dar waṭan)、外面(ẓāhir)は人々と共に、内面(bāṭin)は神と共に」、すなわち出家することなく、常に神と共にあるように生きねばならないということである。また、この教団のスローガンは、「手は労働に(dast ba-kār)、心は友に(dil ba-yār)」で、人間の主要な課題は、自分の近くにいる者たちに仕えることである、とする。

その生活臭に特徴を持つナクシュバンディズムの全ての規定が、社会の全階層にとって魅力的なものとなり、この教団の信者の数は、マーワランナフルやホラーサーンだけでなく、それ以外の地域でも急速に増加した。中央アジアにおいてナクシュバンディズムは、特に15世紀後半に大きな広がりを見せた。当時この教団を率いたのがホージャ・ウバイドゥッラー・アフラル(Ḳhwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār)であり、ペルシア・タジク古典文学者アブドゥッラフマーン・ジャーミー(‘Abd al-Raḥmān Jāmī/1492年没)やウズベク文学の創始者ミール・アリーシール・ナヴァーイー(Mīr ‘Alī-shīr Nawā’ī/1501年没)のような傑出した人々が、その信奉者となったのである。

ホージャ・アフラルことウバイドゥッラー・イブン・マフムード(‘Ubayd Allāh ibn Maḥmūd)は、15世紀マーワランナフルにおけるスーフィー教団ナクシュバンディーヤの長であり、著名シャイフであるが、大封建領主でもあった。膨大な農耕地、動産・不動産を所有し、交易に従事していた。彼はヒジュラ暦806年ラマダーン月(1404年3/4月)タシュケント州(wilāyat)に属するバーギスターン(Bāghistān)村において、世襲のシャイフかつ土地所有者・大商人の家系に生まれた。没したのはヒジュラ暦895年ラビーウル・アッワル月30日(1490年2月21日)である。

スーフィー教団の長としてホージャ・アフラルは、15世紀後半のマーワランナフルとホラーサーンにおける社会の全階層に対して大変な権威を持ち、そのおかげで、これらの地域の社会・政治、同様に社会のイデオロギーにも積極的に影響を与えることができた。16世紀、ミールザー・ムハンマド・ハイダル(Mīrzā Muḥammad Ḥaydar/1551年没)は、自身の素晴し

い回想録『ターリーヒ・ラシーディー (Tārīkh-i Rashīdī)』において、ホージャ・アフラルの大きな権威に言及し、当時のスルターンたちはイーシャーン(=ホージャ・アフラル)とお近付きになるために、そのムリードの一人と関係を築くことが慣例となっていた、と伝えている[TR: 138a]。また、諸史料から明らかなように、ティムール朝のスルターン・アブー・サイード (Sultān Abū Saʿīd/在位1451-1469)、スルターン・アフマド (Sultān Aḥmad/在位1469-1494)、ウマル・シャイフ (ʿUmar Shaykh/1494年没)らも彼のムリードであった。

ホージャ・アフラルは自らの宗教的権威によって、積極的に政治に介入し、影響を及ぼすことができた。これは諸史料に記されている。例えば、1454年、ティムール朝のホラーサーン統治者アブルカースィム・バーブル (Abū al-Qāsim Bābur/ホラーサーン統治1452-1457)の軍に包囲されてしまったサマルカンドの防御に参加し、この都市を守っていた者たちと、逆に見捨てようとしていたスルターン・アブー・サイードの間で仲裁者の役割を果たした。その後の1463年には、タシュケントの近郊シャルヒーヤにおいて、ティムール朝の三人の統治者間の調停を行った。ホージャ・アフラルは死に至るまで、和平調停者としての任務を続けた。

ナクシュバンディー教団に属し、その著作において、このタリーカの理論的規定を発展させた15世紀の詩人・思想家、アブドゥッラフマーン・ジャーミーは、ホージャ・アフラルが常に「神との合一の瞑想」に没頭すると同時に、バハーウッディーン・ナクシュバンドの教えに従うがゆえに、平和の維持にも従事していた、と記している。例えば、その著作『シルスィラトッ・ザハブ (Silsilat al-Dhahab)』においてジャーミーは、ホージャ・アフラルがシャリーアに定められていない税に反対し、統治者たちをして、13世紀チンギズ家の統治下に導入された税徴収(タムガとヤルグ)から、民を解放せしめた、と記している。

ジャーミーは、韻文作品『トゥフファトゥル・アフラル (Tuḥfat al-Aḥrār)』の中では、国土における公正の確立と、チンギズ・ハンの時代から残る圧制の打破に関する、ホージャ・アフラルの功績を賞賛している。また、物語『ユースフとズライハー (Yūsuf wa Zulaykhā)』においては、ホージャ・アフラルが農業の発展に配慮し、これを来世における幸福の保証とみなしていたことについて、書き残している。この作品には、次のような詩が存在するのである。(ここに言う「彼」がホージャ・アフラルのことである。)

世界は彼の瞳には耕地に映る	(jahān bāshad ba-chashm-ash kisht-i kārī)
彼はそこに耕作以外の何も望まない	(namī-khwāhad dar ān juz kishtkārī)
その種子ゆえに不幸にもアダムは	(az ān dānā ki-z ū Ādam ba-nākām)
天国の園からこの網へと赴いたが	(zi-bustān-i bihisht āmad badīn dām)
彼は千の耕地を耕作している	(hazār-ash mazraʿā dar zīr-i kisht ast)
これこそが天国への道中の糧食である	(ki zād-i raftanī rāh-i bihisht ast)

II

ナクシュバンディズムの信奉者たち、特にその指導者たちの積極的な社会的・政治的活動は、この教団のシャイフたちに関する、多くの伝記が物語っている。アブドゥッラフマーン・ジャーミーの『ナファハートウル・ウンス (Nafahāt al-Uns)』、ミール・アブドゥルアッワル・ニーシャーブーリー (Mīr ‘Abd al-Awwal Nishāpūrī) の『マスムーアート (Masmū‘āt)』、ファフルッディーン・アッサフィー (Fakhr al-Dīn al-Ṣafī) の『ラシャハート・アイヌル・ハヤート (Rashahāt ‘Ayn al-Ḥayāt)』、ムハンマド・パールサー (Muḥammad Pārsā) の『マカーマーティ・ホージャ・ナクシュバンド (Maqāmāt-i Khwāja Naqshband)』などがそうである。しかしながら、ナクシュバンディー教団の指導者たちの、社会における積極的な役割を示す、もっとも信憑性の高い史料とみなさねばならないのは、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所で『マジュムーアイ・ムラーサラート (Majmū‘a-yi Murāsālāt)』、あるいは『ナヴァーイー・アルバム』の名称で保管されている写本 [MM] に収められた、数々の自筆書簡である。

このアルバムは594通の自筆書簡を含んでおり、それらの作者は、マーワランナフルの中心サマルカンドやホラーサーンの中心ヘラートに居住し、ヘラートのティムール朝宮廷と広く手紙をやり取りしていた16人の人物である。これらの書簡は1469年から1492年の間に書かれ、国の文書庫に保管され、大部分の書簡の受信人であるアリーシール・ナヴァーイーによって、一つのアルバムにまとめられたのである¹⁾。

アルバム中の過半数の手紙が、前述の詩人・思想家アブドゥッラフマーン・ジャーミーの手になるもので、337通ある²⁾。128通はホージャ・アフラルのもので、彼のムリードたちや、その他15世紀マーワランナフルとホラーサーンの知識人集団に属した、当時の著名人たちのものもある。今回の講演テーマとの関連で特に重要なのは、これらの書簡の作者全員がナクシュバンディー教団に属していた、ということである。

これらの書簡中、受信人の名前はほとんど記されていないが、幾つかの例外がある。例えば、7通の書簡に「アミール・アリーシール」という名が挙げられている。これからの類推、あるいは受信人に対する称号や呼びかけの形式から判断して、このアルバムに収められた書簡の大部分が、以下の者たちにあてられたものであると結論づけることができる。すなわち、1469-1487年ホラーサーンにおいて重要な官職を有していたアリーシール・ナヴァーイー、ホラーサーンにおけるティムール朝国家の君主スルターン・フサイン・バイカラ (Sultān Ḥusayn Bāyqarā/在位1469-1506)、そしてワクフを管理する官僚たちである。

ホージャ・アフラルの書簡の幾つかは、ヘラートのティムール朝宮廷と関係する自らの用件について、事前に援助を確保するため、同志アブドゥッラフマーン・ジャーミーにあてられたものである。このような場合、ジャーミーは自分の方から宮廷に手紙を書き、ホージャ・

アフラルからの要請を付け加えた。このことは、同一問題に関する、ホージャ・アフラルとジャーミーの2通の書簡が⁸、アルバム中に存在することで証明される³⁾。

内容から見れば、ホージャ・アフラルの書簡は、主に、15世紀後半のマーワランナフルとホラーサーンの政治的相互関係、つまり、スルターン・マフムード(Sultān Maḥmūd / ヒサール統治1459-1494)やスルターン・アフマド(サマルカンド統治1469-1494)らスルターン・アブー・サイド(1469年没)の息子たちと、スルターン・フサイン・バイカラとの間に見られる、ティムール朝王族間の領土に関する内紛、封建領主間の内訌といった問題に関わっている。

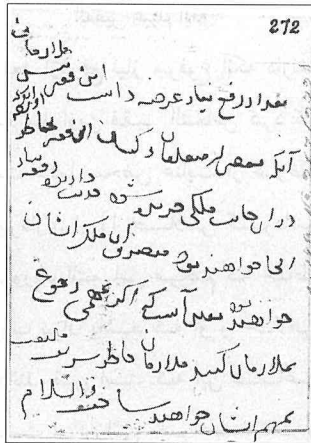
また、宗教とスーフィズムの問題に関して記された、ホージャ・アフラルの一連の書簡も存在する。すなわち、シャリーアの強化や異端の排除に関するこのシャイフの指示、あるいは、宗教的権威による承認なしに内戦で軍事力を行使することを避けるように、という封建統治者への呼びかけ、などである。

アルバムには、ホージャ・アフラルの経済活動に関する書簡も含まれており、ホラーサーンにおける土地購入[文書1(MM: No.272)]や交易活動[文書2(MM: No.317)]などが明らかになる。同様に、ホージャ・アフラルから他の人物への嘆願状も含まれており[文書3(MM: No.506)]、その内容は、上述の三つのグループの書簡に近いものである。例えば、政治的な理由でヘラートに拘留されている人々の解放とマーワランナフルへの送還[文書4(MM: No.542)]、サマルカンドからヘラートに赴いた聖職者への援助、ホラーサーンに向かう、あるいはホラーサーンに居住している、ホージャ・アフラルの信徒たちの財産・交易上の利益擁護、などである。

ホージャ・アフラルの書簡は返信のあてのないものではなく、アリーシール・ナヴァーイー、さらにスルターン・フサイン・バイカラも彼に返事を書いた。現存するスルターン・フサインからホージャ・アフラルへの返信は、政治的な理由でヘラートに拘留されている高官・アミールの、サマルカンドへの出発許可の要請に対するものである。スルターン・フサインは、現状ではそれは不適切であるとしつつも、ホージャ・アフラルの全ての要請、特に、この要請に応える十分な用意があると保証している[AM: 390-393]。

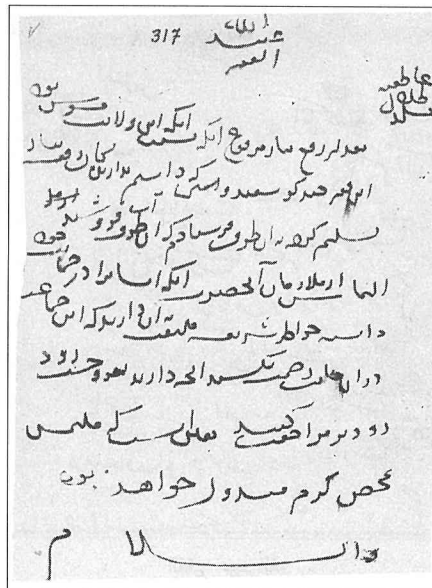
アルバムには、ホージャ・アフラル自身以外に、ティムール朝ヘラート宮廷と活発な手紙のやり取りを行っていた9人の人物、すなわち彼の息子たち、娘婿たち、側近の信徒たちも登場する。それが、ホージャ・アフラルのムリード・娘婿であり、ホージャ・アフラルに捧げられた有名な聖者伝『マスムーアート』の著者ミール・アブドゥルアッワル・ニーシャープーリーや、ホージャ・アフラルのムリードであり娘婿のホージャ・アリー(Khwāja 'Alī)、同時代の人々に「イーシャーンの影」と呼ばれていた、ホージャ・アフラルの最も身近なムリード、マウラーナー・カーシム(Mawlānā Qāsim)らである。

これらの人々の書簡では、ホージャ・アフラルへの言及の中で、ホージャ・アフラルの書簡にも見られたような、社会の政治的・経済的・宗教的諸側面に関する問題について、頻繁に触れられている。そのほかこれらの書簡の中では、発信人自身や、他の聖職階級に属する



文書 1

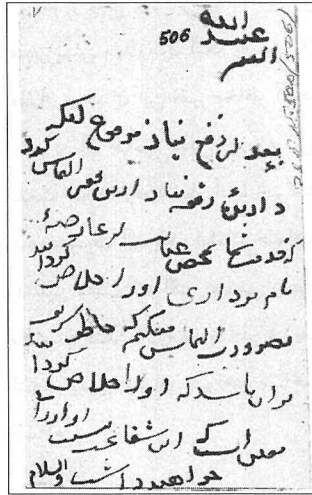
بعد از رفع نیاز عرضه داشت این
فقیر پیش ملازمان آنکه بعضی از
متعلقان و کسان این فقیر بخاطر آورده
اند که در آن جانب ملکی خریده شود
خدمت دارنده رقعۀ نیاز آنجا خواهند
بود متصرف آن ملک ایشان خواهند
بود یقین آنست که اگر بمهمی رجوع
بملازمان کنند ملازمان خاطر شریف
ملتفت بمهم ایشان خواهند ساخت
والسلام



الفقير عبد الله

بعد از رفع نیاز مرفوع آنکه بسبب آنکه این ولایت مشوش بود این فقیر
چند گوسفند و اسبی که داشتم بدارنده گان رقعۀ نیاز تسلیم کرده به آن طرف
فرستادم که آن طرف آب فروشد التماس از ملازمان آنحضرت آنکه ایشانرا در
حمایت خود داشته خواطر شریفه ملتفت به آن دارند که این جماعه در آن
جانب زحمت نکشد آنچه دارند بفروخت رود زودتر مراجعت کنند یقین
است که ملتمس بمحض کرم مبذول خواهد بود والسلام

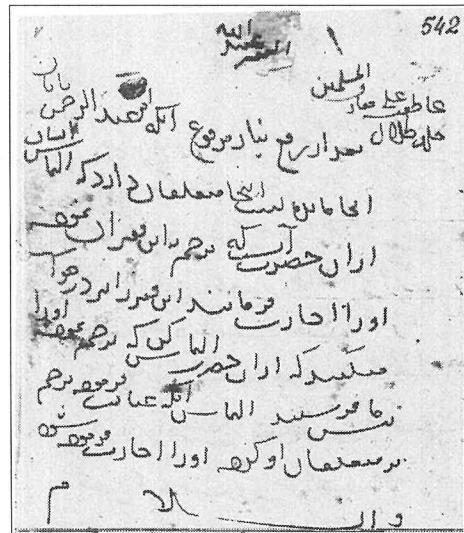
文書 2



الفقير عبيد الله

بعد از رفع نیاز مرفوع آنکه دارنده
 رقعۀ نیاز ازین فقیر التماس کرد که
 خدمت شما بمحض عنایت از عارضۀ
 نام برداری او را خلاص گردانند
 بضرورت التماس میکنم که خاطر
 شریف بران باشد که او را خلاص
 گردانند یقین است که این شفاعت
 بنسبت او ارزانی خواهند داشت و
 السلام

文書 3



الفقير عبيد الله

خلد ظلال عاطفته علی مفارق المسلمین

بعد از رفع نیاز مرفوع آنکه اهی عبد الرحمن تابان آنجا مانده است اینجا
 متعلقان دارد که التماس ایشان از آن حضرت آنست که ترحم به این فقیران
 نموده او را اجازت فرمایند این فقیر را بر در خواست میکنند که ازان حضرت
 التماس کن که ترحم نموده او را پیش ما فرستند التماس آنکه عنایت فرموده
 ترحم بر متعلقان او کرده او را اجازت فرموده شود و السلام

文書 4

人々の、物資的利害に関する、個人的な要請が述べられている。例えば、ホージャ・アリーは、自らの書簡の中で、スルターン・フサイン・バイカラに呼びかけて、全面的な恩赦、すなわち捕虜となったスルターン・マフムードの部下全員の解放を嘆願している[MM : No.490/496]。また、人々に対する寛大な態度の必要性を問題として、ホージャ・アフラルの命令に従ってサイドたちが仲介をしている当該の交渉が、ホージャ・アフラルによって是認されていることを伝えている[MM : No.557/563]。別の書簡でホージャ・アリーは、受信人アミール・アリーシールによる、休戦と講和に向けてのスルターンたちの交渉の成果の報告に、満足の意を表明している。このアリーシールの書簡は、ホージャ・アフラルにも読まれ、賞賛された[MM : No.534/540]。

ホージャ・アリーの幾つかの書簡によって、ヘラートの社会における活動家のスーフィーたちが果たした重要な役割や、彼らがマーワランナフルとホラーサーンのスルターンたちや高官たちに対して持った、大きな影響力について、判断することができる。

また、別の一連の書簡においては、ホージャ・アリーは、ホージャ・アフラルの交易活動のために忙殺されている。例えば、ホージャ・アフラルが販売するためにヘラートに送った、数ハルヴァールの紙、胡麻、米、綿花その他の商品を現金化するにあたって、受信人に援助を要請している[MM : No.386/392]。

ナクシュバンドの人文主義的理想、すなわち人に対する配慮、公正を求める闘い、などが最も明瞭に示されているのは、教団の正にこのような側面を自らの作品の中で詩にうたっていた詩人、アブドゥッラフマーン・ジャーミーの自筆書簡である。例えば、ジャーミーは、封建領主間の内紛や戦闘が大きな経済的損失をとまなうことを理解し、臣民に被害を与えることのない、軍事紛争の和平的解決をスルターンに呼びかけている[MM : No.1, 30/31, 34/35 etc.]。

ジャーミーは庶民の生活の改善に努め、王に対し、シャリーアに規定されていない臨時税を土地所有者から免除することや、税「マール(māl)」を現金から現物に代えること、などについて嘆願している[MM : No.100/105, 150/155]。また、ジャーミーは、一連の書簡の中で、受信人たるスルターンに対して、頻繁な臨時税賦課が国家経済にいかにより有害な影響を及ぼすかを証明し、それらを濫用しないよう要請しており、あたかも訓戒であるかのごとく、こう述べている。

もしそれら[税]の幾つかでも不可欠だとお考えになるなら、ムスリムたち[すなわち臣民]の抑圧を断念することの方が、もっと不可欠です。[MM : No.70/75]

アブドゥッラフマーン・ジャーミーと同じくホージャ・ウバイドゥッラー・アフラルは、実社会における、ナクシュバンディズムの人文主義的理想の達成において、もう一人の同志、すなわち詩人でありホラーサーンのティムール朝君主フサイン・バイカラのもとで高官でもあった、アリーシール・ナヴァーイーの協力を必要としていた。ナヴァーイーが自らの創作活動のため、宮廷での官職から退こうとした時、ホージャ・アフラルとジャーミーはともに次のように書き送ったのである⁴⁾。

強力なスルタンの側にいて、自分の意見に耳を傾けさせる可能性を持つことは、大きな幸福であり、この幸福の益は、自らと自らの時間をムスリムたちの利益のために捧げることや、仮借なき者たちの悪事や圧制を遠ざけることにあります。[MM : No.64/69, No.544]

お わ り に

ここまで述べてきたことをまとめれば、以下のようにいえよう。14世紀にバハーウッディーン・ナクシュバンドによって提唱された、ナクシュバンディズムの主要な規定、すなわち、人文主義、勤労、公正、人への配慮は、15世紀における信奉者たちの間にも生き続けていた。だが、15世紀には、この教えのさらなる発展が見られる。スーフィー教団ナクシュバンディーヤの人気は並々ならぬものとなり、社会の上層部に属する多くの人々が、その信奉者となった。そして、15世紀におけるこの教団の長ホージャ・アフラル自身、ただの平凡な目立たぬ農民ではなく、大封建領主であり、自らの活発な経済活動の結果、当時の最も富裕な人物の一人となった。教団の長としての権威によって、ホージャ・アフラルは、積極的に国家の政治・経済に影響を及ぼし、封建領主間の内訌を抑制し、ナクシュバンディズムの原則に一致して広く調停活動を行うことができたのである。そして、これら全てが、ティムール朝治下の15世紀中央アジアにおける、全般的な文化の発展の、精神的基盤のようなものであったのである。

※本稿は1995年12月2日第32回羽田記念館講演会(京都大学文学部)における講演内容(ロシア語)の日本語訳である。翻訳の際、転写法などを若干改め、注と文献表を付け加えた。

注

- 1) この写本史料の形態、保存状態、書簡の作者、編纂の背景などについては Urunbaev 1982 : 3-37に詳しい。所収書簡を用いた研究には Nabiev 1948, Semyonov 1951, Urunbaev & Epifanova 1967, Urunbaev 1982の序文, Urunbaev 1995などがあり, Urunbaev & Hasanov 1990には所収書簡の一部の現代ウズベク語訳が見られる。
- 2) この全337通の書簡のファクシミリと、うち274通のロシア語訳が Urunbaev 1982に収められている。なお、その活字版が1987年カーブルで出版された(Nūr al-Dīn 'Abd al-Rahmān Jāmī, *Nāma-hā*)が、編者による校閲が不可能であったため、誤植が非常に多く、利用には注意を要する。
- 3) 二つの例が挙げられる。MM : No.276/281のホージャ・アフラルの書簡と MM : No.262/267のジャーミーの書簡, MM : No.307/312のホージャ・アフラルの書簡と MM : No.64/69のジャーミーの書簡がそうである。
- 4) ジャーミーの送った書簡の方[MM : No.64/69]は、ジャーミー自身が編纂した書簡集にも収められている[Munsha'āt : 157]。

参考文献

- AM : *Asnād wa Maktūbāt-i Tārīkhī-yi Īrān az Taymūr tā Shāh Ismā'īl*, ed. 'Abd al-Husayn Nawā'ī, Tehran, 1977.
- MM : *Majmū'a-yi Murāsālāt*. Институт востоковедения АН РУз. Рук. инв. № 2178.
- Munsha'āt : Nūr al-Dīn 'Abd al-Rahmān Jāmī, *Munsha'āt*, ed. Adīb Tūsī, *Nashrīya-yi Dānishkada-yi Adabīyāt-i Tabrīz*, 71-74 (1346).
- TR : Mirzā Muḥammad Ḥaydar Dūghlāt, *Tārīkh-i Rashīdī*. Институт востоковедения АН РУз. Рук. инв. № 1430.
- Nabiev, R.N. (1948) (Набиев Р.Н.) Из истории политико-экономической жизни Мавераннахра ХУ в. (заметки о Ходже-Ахраре). — Великий узбекский поэт. Ташкент.
- Semyonov, A.A. (1951) (Семенов А.А.) Два автографа Ходжи Ахрара. — Эпиграфика Востока, вып. 5
- Urunbaev, A.U. (1982) (Ўрунбаев А.У.) Письма-автографы Абдулрахмана Джами из "Альбома Навои". Ташкент.
- Urunbaev, A.U. (1995) (Ўрунбаев А.У.) Письма-автографы из «Альбома Навои»—источник по изучению налогообложения в Хорасане ХУ в. — Восточное историческое источниковедение и специальные исторические дисциплины. вып. 3. Москва.
- Urunbaev, A. & L. Epifanova (1967) The Letters of Abdarraḥman Jāmī as a Source of the Characteristics of the Poet's Personality, *Yādnāme-ye Jan Rybka*, Prague/The Hague/Paris.
- Urunbaev, A. & M. Hasanov (1990) (Ўринбоев А. & М. Ҳасанов) Навоий замондошлари мактубларида. Тошкент.

(著者：ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所)

(訳者：京都大学大学院文学研究科)